

未来の世界と自分のために

【実践者】

氏名	牧之段 はるか	学校名	茨城県立牛久栄進高等学校
担当教科等	国語、総合的な探究の時間	対象学年	第2年次
実践年月日もしくは期間(時数)	15 時間		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域

2 年次 総合的な探究の時間

2. 単元名と単元目標

- ① 単元名
(指導要領解説に「総合的な探究の時間の内容は、……各学校において定めるものである。」とあり、本校は単元が設定されていない。)
- ② 単元目標
自ら課題設定し、探究方法を模索できる能力を育成する。(「総合的な探究の時間」2 次の目標)
- ③ 関連する学習指導要領上の目標
探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。

3. 単元の評価基準

- ① 知識及び技能
探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解している。
- ② 思考力、判断力、表現力等
実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現している。
- ③ 学びに向かう力、人間性等
探究に主体的・協働的に取り組もうとしているとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとしている。

4. 単元設定の理由・単元の意義

- ① 単元設定の理由
(単元設定なし)
- ② 単元の意義
2年次の探究の目標は「自ら課題設定し、探究方法を模索できる能力を育成する。」である。本校

は毎年2年次の秋に沖縄への修学旅行を実施するが、これを探究の实地調査の機会と捉え、それにむけて昨年度は探究の時間を使って調査の種類や方法の基礎を学んだ。今年度は1年次の学びを活かして修学旅行で獲得した一次情報を元に考察し、グループでの話し合いや発表を通して課題理解や解決に向けた取り組みなどについて更に深めさせている。「将来の予測が困難な時代において、…(中略)…課題解決などを通じて、持続可能な社会を維持・発展させていく」(R5.3.8. 中教審答申)ことが求められる生徒達にとって、自分が直面している課題を見いだす力、問いを繰り返して解決に導く力を育む学習に取り組む意義は大きいと考える。

③ 生徒観

2年次の生徒数は312名で、全体的に素直でおとなしく学習に前向きな生徒が多い。外国籍の生徒は数名程度だが、国際都市つくばに隣接していることもあり、外国にルーツのある方の存在は身近であると考えられる。

本校は毎年国際交流として姉妹校と交換留学を実施しており、この制度を利用してアメリカやオーストラリアで2週間ほどホームステイを経験している生徒もいる。また大学選びで留学制度のある国際系の学部を希望する生徒が複数いたり、勉強のために長期休みを海外で過ごす生徒がいたり、特に先進国に対して憧れに近い感覚を持っている生徒は多い。

④ 指導観

毎年3割ほどの生徒が国公立大学に進学し、専門学校や就職はごく少数といういわゆる中堅進学校である。1年次の終わりに文理選択を行っており、理系5クラス文系3クラスという構成である。現在は3年次の科目選択を控え、進学や自分の将来について真剣に考え始めている生徒も多い。

今年度は総合的な探究の時間と修学旅行を絡めて、課題発見や課題解決の力を伸ばそうと考えている。班別学習で、実際に沖縄で行う現地調査を有意義なものにするために、動画での事前学習や探究のテーマ設定を重視した。調査で得られた情報から考察する際、ラーケーションを利用して更に理解を深めようと調査を重ねたグループもあった。

ただ探究が修学旅行を利用したものであったため、この1回きりの特別な取り組みであるという意識を生徒達から感じている。そこで探究の大まかな流れがわかったあとに次年度やこれからの生活につながるような時間を入れたいと考え、本時の授業構想に至った。指導者がウガンダ共和国で見て感じてきたもの、そこで働く日本人のこと、現地の方々の生き生きとした姿をフोटランゲージやグラフを通して学び、地球上の全員がよりよく生きるために自分にできることを考える、それこそが探究活動であるということに気付かせたい。探究をはじめとする各教科・科目等で習得した概念を実生活の課題解決に活用することを通してそれらが統合され、より一般化されることにより、汎用的に活用できる概念を獲得してもらいたいと考えている。

5. プログラム計画

回	テーマ ねらい	方法・内容	使用教材等
1 2 3	SDGsを理解しよう ねらい: 探究とは何かを知る。 SDGsとは何かを知る。	動画を視聴し、ワークシートにまとめる。	・修学旅行探究ノート ・動画(SDGs school) ・ワークシート
4	修学旅行事前学習 ねらい:修学旅行先のことを知り、現地で探究するテーマを決める。	沖縄に関する以下の動画を視聴し、沖縄を知る。 ・自然・環境編・平和編 ・歴史・文化編・産業編	・動画(沖縄観光コンベンションビューロー監修動画)
5 6 7	問いを決め、情報収集の計画を立てよう ねらい:班別研修で行うフィールドワークを確定する。	・班別に分かれ、調べるテーマと研修先を決める。 ・問いの解決のために、現地調査でしか得られない情報とその収集方法についてグループで話し合い、ま	・iPad ・修学旅行探究ノート ・ワークシート

		とめる。	
8	現地で情報収集 ねらい: 立てた問いについて実際に調査する。	・現地調査で分かったことや気付いたことをまとめる。	・iPad ・ワークシート
9 10 11 12	調査結果をまとめよう ねらい: 調査結果をまとめ、ポスターを作成する。	・収集した情報や気づきを話し合い共有し、グループでの問いに対する答えと、その根拠となるデータ等についてまとめる。 ・ポスターを作成する。	・iPad ・修学旅行探究ノート ・ワークシート
13 14	ポスター発表 ねらい: 調査結果を発表する。	【クラス内発表】 ・電子黒板に作成したポスターを投影し発表する。 ・クラス代表を決定する。 【全体発表】 ・クラス代表のポスターを体育館に掲示して発表を行う。	・iPad ・ポスターデータ ・発表用のポスター
15 本時	3年次に向けて ねらい: 探究活動は学校内の学習活動であることにとどまらず、生きていく上で関わり続けるものであると気付かせる。	・JICA 教師海外研修に参加した教員の話聞く。	・iPad

6. 本時の展開

時間	1時間		
本時のねらい	・実際にウガンダ共和国で研修してきた教員の話を通して、課題を発見し探究することの意義や価値を理解する。 ・発展途上国に対して親しみをもち、自分の生き方・在り方を考える。		
過程(時間)	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入(5分)	・ガンダ語であいさつ ・参加の経緯説明		
展開(30分)	1 「ウガンダってどんな国？」 ウガンダの基本情報、教員の経験談などを写真やクイズで知る。  【ウガンダを紹介している様子】 2 「データで見るウガンダ」 日本とウガンダのデータを比べ、どんな課題があるかを読み取る。 3 「世界は自分とつながっている」 自分の生き方・在り方を考える。	・「縁遠いアフリカの国」ではなく、ウガンダに親しみを持たせるようにする。 ・「他国を知ることとは日本を知ることにもつながる」ということに気付かせる。 ・課題の発見と解決には知識が必要であり、「受験勉強」もそれに資するものだ気付かせる。	【資料1】指導者作成のスライド 【資料1(抜粋)】生徒用ワークシート
まとめ(15分)	本時で学んだことをまとめる。 事後アンケートを行う。	・自分の周りをたどっていくとウガンダにたどり着くように、自分は世界中と関わっていることに気付かせる。	【資料1】指導者作成のスライド 事後アンケート

7. 評価規準に基づく本時の評価方法

課題を発見し探究することの意義や価値を理解している。
発展途上国に対して親しみを持つことができる。
世界中の人がよりよく生きていくために自分にできることを考えることができる。
(事後アンケート)

8. 学校外との連携

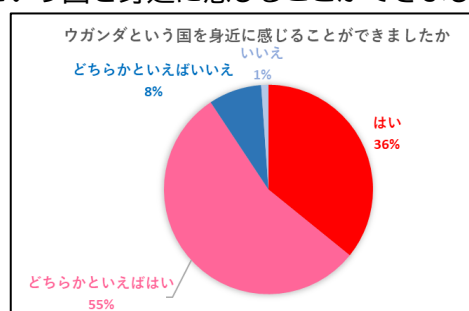
・JICA 海外協力隊の瀬戸凌平隊員、金井美紀隊員
牛久市にゆかりのあるお二人から牛久栄進高校生へのメッセージをいただき、紹介した。
自分と同じ場所で生活している人が今現在ウガンダで尽力していることを知り、自分の進路の選択肢として現実味を感じさせることを目的としている。
また、彼らの感想や質問などを収集し、各隊員にフィードバックすることで一層つながりを深め、今後の学校での教育活動に活かしたいと考えている。

9. 生徒の学びの軌跡

授業後に生徒を対象にアンケートを行った。(回収:268 名)
なお、問いが誘導的になることを避けるため「ウガンダという国を身近に感じることができましたか」と意識調査以外は記述式で回答させている。

「ウガンダという国を身近に感じることができましたか」

はい	96名
どちらかといえばはい	147名
どちらかといえばいいえ	22名
いいえ	3名

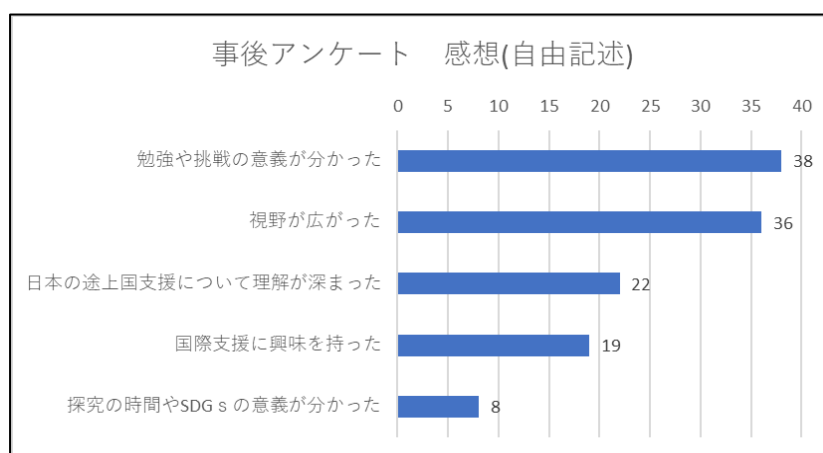


・肯定的な意見が9割を超えた。たとえいままで関わりを感じたことのないような世界であっても、生徒にとって身近な存在である教員が行くことで親近感を持つことができたのだと思う。教員研修の意義を再確認する結果となった。

・「いいえ」「どちらかといえばいいえ」の生徒は関心がないわけではなく、世界と自分の関係を捉えなおしたときに思ったより世界は広い／知らないことがたくさんあるということを知った結果であり、これまでの認識が揺さぶられ再構築できたのではないかと考える。

「感想」

・写真や動画よりも、データに言及しているもののほうが多かった。生徒が主体的に考えた場面だったからだと考える。
・私がウガンダについて紹介したことへの理解や共感も数多く寄せられたが、今回はそこからより抽象的普遍的なテーマに思い至ることができたものや、自分の経験などを通して考えたことなどが見取れるものを以下に挙げる。



【視野の広がりや行動変容が見取れるもの】

「何も知らないウガンダのことをイメージしようと思ったって何にも分からない。知らないことを知ろうとして行動することは大切だということを学んだ。今日聞いたウガンダの話は家に帰ったら家族に話そうと思う。」

「日本もウガンダ支援に力を入れていることを知った。日本のウガンダの人達に技術を教えながら手伝うという支援の仕方が素敵だと思った。もっと世界にも目を向けたい。」

「日本を超えた世界も見据えて生活をしていくとまた違った生き方になっていくと思いました。足元に地球があるような感覚を持ち続けたいと思いました。」

「正直言って私は元々海外とかに全く興味がありませんでした。…(中略)…でも先生の話聞いて少し外に出てみてもいいかなって思いました。家の中にひきこもるままでは見える世界も見えないしそもそも世界に興味すらわかないなって思いました。海外に行くのはハードルが高すぎるけれど自分が見たことのない景色を見たいなって思いました」

「実際に行ったときの写真や動画を見たり、話を聞いたりすることができて、海外への関心が高まった。また、これからの自分のやりたいことはなんだろうと考えるきっかけになった。」

「海外派遣は語学力とかより、自分が海外に興味があったら気軽に参加していいのかなと思った。自分も海外派遣に参加してみたいと思った。」

「ウガンダの生徒が牛久栄進の制服が可愛いって言うてくれていたと聞いた時に『そうだよね!!』と思って、一気に“海外の人”から“同じ年代の子”に距離が縮まった気がしました。」

「自分が世界の上に立ち、広い視野を持った生活を送ることが大切だと感じた。海外でなくても自分が行ったことのない場所、興味のあるところには積極的に行きたいと思った。」

「自分は学校の海外派遣プログラムでアメリカに行ったことがあって、そこでもう海外行きたくないなって感じていたけど、今日話を聞いて話せなくても行けるなら行っちゃえってという言葉を書いて、また行けるなら行きたいなと思うことが出来た。協力隊も、怖いが少し参加してみたいという気持ちになった。」

「『世界を考えるのは自分を考えることの延長、世界平和を考えるのは家族や友達と仲良くすることの延長』という言葉が印象に残っている。世界、と言われると遠いことのように思ってしまうが、あくまでも身の回りのことの延長上にあるんだと気付かされた。」

「国際支援とかいうと実際に現地に行って自分がなにかしなければいけないと思っていたけど、そうじゃなくて、まずはその地域のことを知る、考えるということでも小さいように思うことでも、それは現地の人たちにとっては救いなのかもしれないと思った。自分の興味、関心に問わず気になったことはどんどん調べたい。」

「識字率や死亡率など、意外な数字が多くて、でも発展途上国だから意外だと思ったのかもしれないと、考えさせられた。」

「知らない所へ行くこと挑戦することは決して怖いことではないんだと思った」

「人助けとか立派な理由じゃないけど自分も海外にいったら自分でもいろんなものを見て知りたいと思っているのでウガンダの話は面白かったです！」

「ウガンダの発展に日本が大きく関わっていたこと。それが日本や世界の発展にも繋がることを知り、国際支援が魅力的に感じた。」

「何かに挑戦して自分の世界を広げようとするのは自主的に機会を得ないといけないしとても勇気がある事だと思ったけど先生のウガンダの話聞いて自分も何かに挑戦したいと思った。」

「国際支援への興味の切り口となるようなとてもわくわくする講話でした！私はまだまだ海外に行く、というのは抵抗(不安?)が拭えないのですが、自分の興味の視点から考えてみたのは、海外に本の支援ができれば面白だろうな、ということです。その過程で「直接現地の人に会ってやりたいことがあるぞ！」となったら、行ってみたらいいかなと思いました。」

「私は今まで『発展途上国は暮らしぶりから可哀想で不幸だ、だからその状況を改善すべきだ』なんて考えていましたが、すごく上から目線で他人事な考え方をしていたと反省しました。私も海外行ってみたくくなりました！！」

【新たな疑問を持つなど、考えを深めているもの】

「識字率に関して、予想よりも高くて驚いたけど、確かに先生の言う通り 9 割って高くないと後から思いました。また、文字が読める人と読めない人がどのくらい一緒に生活してるかが気になりました。」

「字が読めない 10%の人はどうやって生活しているのか気になった。」

「ウガンダと日本のデータの比較を見て、『手洗い場所有率の低さと、死亡者数に関係がありそうだ』など、色々考えさせられた。」
「学校に入学しても卒業できないのは友達とも会えなくなるし、子ども達にとってとても辛いことだと思った。」

- ・知らない世界に飛び込むことや挑戦することに対して、恐ろしく、勇気のいることだという認識が生徒にあることがわかる。
- ・授業を通して視野の広がり、自分を取り巻く世界への関心の高まりが読み取れる。

10. 自己評価

① 成果が出た点

生徒が自分の人生に無関係だと思っている遠い世界に親しみを持たせ、自分と世界のつながりを伝えるために、教員の体験談は有用であると実感した。自分の行動が世界中の人々に影響することに気づかせ、今までの探究で学んだ考え方や課題発見力・課題解決力と関連させてこれからの行動選択について考えさせることができた。

② 苦労した点

- ・ウガンダに関する授業ができる時間が1時間しかなかったこと。伝えたいことはたくさんあるため、授業の内容を絞ることが難しかった。
- ・約300人の生徒に対して一斉に授業を実施したこと。初めての経験だったため、情報を伝えること、生徒を動かすこと、考えを深めさせること、何を優先させてどういう方法を用いるべきか見定めるのが難しかった。

③ 改善点

- ・今日のめあてを1つに絞り、それに対応した振り返りを行う。それにより生徒も見通しが持てるし、めあて未達成の生徒のフォローも早めに対応することができる。
- ・この授業を踏まえて生まれた疑問を探究テーマとすることができればより世界に目を向ける生徒も増えると感じた。探究テーマ決定に関わる授業とするならば1年次、もしくは2年次の最初に行うのが最適なのではないかと思う。

④ 自由記述

・ウガンダに実際に行ったことに対する称賛(そんなことをするなんてすごい、など)が複数あり、この話をしたのが外部講師であれば「(自分とは関係ない世界にいる)すごい人」という感想で終わってしまうかもしれないという危惧を感じた。同時に、普段接する教員が伝えるからこそより世界とのつながりを実感させることができるこの研修の意義を感じた。

・授業で伝えられないことは授業外で伝わるように工夫をした。

帰国してすぐ、校内にウガンダコーナーを設置した。今回生徒に見せたいものや伝えたいことの中で、時間の都合上削ったものもたくさんあるが、コーナーにある資料でそれらが伝わるように配置し、授業中にも生徒に紹介して誘導を行った。

見学に来てくださった方々をご案内した際、置いてあったノートを見て「ここに生徒が自由に記入していいのですか？」と質問を受けた。実際は私の研修中に使ったノートであったためそのような用途は考えていなかったが、生徒の反応を掴むととてもいいアイデアだと思ったので今後の参考としたい。

・教育でよく言われるように、ウガンダ「を」教えるのではなく、ウガンダ「で」教えることを目指したかったが、そのためには授業時間がある程度必要であることを痛感した。本校の探究の時間は4月にはやることが全て決まっているため、体系的な授業をするとなると早くても次年度以降となる。即時性が学習効果に及ぼす影響もあるため、実施時期に関してはよく考えたい。学校の動き方と関係各所の動き方を双方が知っているとより協力しやすいと感じた。

11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

- ・ウガンダコーナーの設置
- ・教員に対して写真や動画などを各自の授業資料として共有
- ・JICA 施設訪問の事前研修会(「話の聞き方～より深く学ぶために～」)



・「途上国に関わりたい」「アフリカにいる日本人や現地の人との交流をしてみたい」で「はい」と回答した生徒中心に声をかけ、実際にウガンダとつないで現地と交流するなどの継続的な活動につなげたいと考えている。

【JICA 施設訪問の事前研修会の様子】

12. 自由記述

今回学年全体を一度に動かして授業をするという初めての試みで、悩むことも多かった。その時に役に立ったのが、事前研修や事後研修で学ばせていただいた実践の手法や主体的に学習に取り組ませる仕掛けなどである。ウガンダに行く前に授業構想があるとよいが、場合によっては予定通りにいかなかったり、大きな変更があったり、もっと他にやりたいことがあとから見つかったりすることもある。めあてや生徒の実態に合わせて実践方法を選択できるように、これからも学び続け、引き出しを増やしていきたい。

教師海外研修は途上国の現状を教師が知ることがゴールではなく、それを子どもたちに提供して広めたり深く探究させたりすることが大事な目的である。一緒に参加した先生方が現地での経験をどのように活用しているか、授業実践で拝見したことはよい刺激になった。今回授業で「あなたたち(生徒)の姿を見て挑戦しようと思った」と伝えたが、この自分の経験を生徒に還元するために、様々な人や機関と協力しながら力を尽くしていきたい。

13. 参考資料

資料名	著者名等	出版元、URL 等
「世界の国を知る 世界の国から学ぶ 私たちの地球と未来 ウガンダ共和国」	愛知県国際交流協会	https://www2.aia.pref.aichi.jp
「ウガンダを知るための 53 章」	吉田昌夫・白石壮一郎	明石書店
「ネルソン・マンデラ 未来を変える言葉」	ネルソン・マンデラ (訳:長田雅子)	明石書店
「ぼく、モグラ、キツネ、馬」	チャーリー・マッケジー (訳:川村元気)	飛鳥新社
「世界子供白書 2023」日本語要約版		UNICEF

14. 本時で使用した資料

【資料 1】指導者作成のスライド ※下記 QR コード(リンク先:Google ドライブ)

【資料 1(抜粋)】生徒用ワークシート(資料 1 の 33、35、37、39、41、43、45 ページのみ)

